私が最近読んだ本の中で非常に気に入っているものがある。タイトルは「ラリルレ論」で、私が大好きなロックバンドRADWIMPSのボーカル担当・野田洋次郎が綴った日記形式エッセイだ。この書籍は彼が日々の中で感じた恋愛観や死生観、音楽論や政治問題、世界で起こっている様々なニュースに対しての彼独特の色眼鏡を通した考察が記録されている。私は彼の作詞作曲する楽曲にはとても共感でき、彼の書く詩には何度も救われた事がある。彼は一体どういった人間なのか、歌だけでは完全に理解することの出来ない彼の新たな一面を探るため私はこの書籍を手にした。

№

このエッセイ本の中で野田洋次郎は様々な議題に対して彼が抱いている疑問や考えを述べている。そしてそのほとんどの議題について、彼は明確な結論や確信を持っていない。それはまるで、読者一人一人に「絶対的な答えを出す必要はないけれど、とにかく僕と一緒に一度考えてほしい」と訴えているように私は受け取った。ここで一つ彼が思春期について綴った文を引用しよう。「僕らは思春期の中で精欲、食欲、睡眠欲、活力、体力、知力、好奇心、反抗心、猜疑心、絶望、そのすべてが最高次元で交差し合った奇跡の１０代という時期に勉強という最も不向きな行いを強いられる。」彼によると東大や京大に入ってしまうような人間は異常であり、しかし「３歩歩けば違うものに興味が向くあんな時期に一直線に勉強に励む」彼らに対して頭が上がらないと言う。このように野田は勉学に対して単に独り言のような形で読者に問いかけるのだ。

エッセイ本などは普段あまり読まないのだが、今回この本を読んで改めて野田洋次郎独特の世界観や物の見方に感動した。RADWIMPSのファンではない方にもチャンスがあればぜひ読んでほしいと思う。